



病がくれた勇気 / カラー

ある患者さんの詩を紹介します。その人の約50年の人生は、本当にいろいろなことがありました。在宅で緩和ケアを必要とする状況となり、ご自宅へ伺うようになりました。聡明で、いろいろな事に気づき、そして言葉にできる力があることなどから、ディグニティセラピーを紹介しました。

しかし、私には伝える相手がいない…と話されました。そして、この世から静かに消えたいとの思いも打ち明けられました。その言葉に含まれるご本人の深い悲しみと苦しみが、伝わってきました。

それでも、人はたとえ苦しみを抱えたとしても、穏やかに過ごせる可能性を持ち続けると信じて、同じく闘病されている誰かであったり、これから社会に出て行く子供達にむけて、メッセージを頂けないかと伺ってみました。

彼女は、“他の誰かの役に立てるならば…”と、詩を書いてくれました。ペンネーム Nana として紹介します。小澤竹俊

「病がくれた勇気/カラー」written by Nana

苦しみは、一人でがんばらなければいけないと思いつんでいた。

わたしの目に映る景色はモノクロだった。

でも、ある日、ほんの少しの“勇気という一歩”を踏み出すことで、

あたたかな手を差し伸べてくれる人たちがこんなにもたくさんいることに気がついた。

その瞬間、わたしの目に映る景色に色がついた。

わたしが、あなたが生きているこの世界は、明るく・あたたかく・無限に優しい。

だから、一人でがんばらないで。

声にだして仲間を呼ぼう。

ほんの少しの勇気をだして。

この世界が七色に輝き出すから。

第17回追想の集い

11月4日、17回目となるめぐみ在宅クリニック追想の集いを開催いたしました。音楽の力は偉大です。それまで蓋をしていた心の扉が、一瞬で開放されていくことを実感します。企画をして頂いためぐみ在宅クリニック グリーフサポートチームの加治陽子さん、山本緑さん、そして、心を込めて歌って頂いたソプラノの麻野恵子さん、バリトンの星野光則さん、有り難うございました。



いのちの授業と親の介護と仕事の両立

一見異なるテーマに見える“いのちの授業”と“親の介護と仕事の両立”ですが、その鍵となるコンセプトは、困難な中で自己肯定感を育むレジリエンス教育（折れない心を育てる授業）にあります。苦しみを通して、それまで気づけなかった支えを得た人は、穏やかさを取り戻します。それは、患者さん・家族だけではありません。厳しい社会をこれから生きる子ども達も、そして、親の介護と仕事の両立で悩む40-50代の世代にも必要なエッセンスです。横須賀市の高校で、このテーマで初めて授業を行いました。さらに経験を積みながら、いのちの授業を通じて、40-50代の世代にも、このテーマを届けていきたいと思えます。

診 療 実 績

	2006-2016年	2017年 1-7月	8月	9月	10月	2017年 計	総計
訪問回数	50,852	5,322	781	787	757	7,647	58,499
自宅永眠	1,769	118	20	23	17	178	1,947
施設永眠	218	36	7	3	8	54	272
在宅 (自宅+施設)	1,987	154	27	26	25	232	2,219
病院永眠	487	61	5	11	15	92	579